

ニックネームの被呼称時に生起する感情に基づく分類

野中陽一朗・井上 弥

(2011年10月6日受理)

The Classification on the Basis of Emotions that Elicit in the Called Nicknames

Youichirou Nonaka and Wataru Inoue

Abstract: The purpose of this research was to investigate the classification on the basis of emotions that elicit in the called nicknames. For this purpose, we selected 12 nickname stimulations in which are typical communication scenes. Contextual information of the nicknames was regulated, 80 university students were asked to perceive six emotions. The results showed (1) people can perceive the basic emotions from nicknames, (2) three clusters was extracted on the basis of emotions that elicit in the called nicknames in men's and women's both groups, and (3) each group has the characteristic of the emotion rating. On the basis of the results of this study, we discussed the problems of the future of nickname's studies.

Key words: nickname, basic emotions, classification, sex difference

キーワード：ニックネーム、基本感情、分類、性差

問題と目的

他者を呼ぶ際には、相手の注意を喚起する姓名やニックネームが使用される。岡本（2000）は、会社内の上司の姓名を「さん付け」で呼ぶことが、対人関係に影響を及ぼすことを指摘している。大野木（2000）によれば、当該人物の行動特徴や性格特徴に基づくニックネームは、その周囲の人々からの対人的な認知や人物評価の産物として表現されるものである。このようなことから、姓名の「さん付け」やニックネームは、対人関係において重要なものとなるだろう。

このような呼称の中で、ニックネームに関しては、姓名とニックネームの比較やニックネームの由来から、ニックネームを分類する研究がなされている。赤尾（1986）は、自らの小学校・中学校時代のクラスメートが使用していたあだ名や呼び名について、姓や名そのまま、姓や名の一部、姓や名の変形や読みかえ、姓の一部プラス名の一部、有名商品・有名人物などにひっかける、その他、姓名とは無関係といった大きく7カテゴリーがあることを見出している。大野木

（2000）は、青年期男女を対象に調査を行い、ニックネームの由来から、教師のニックネームが、姓の変形、名前の変形、姓名の変形、身体的特徴の指摘、身体的特徴の見立て、衣服等の装いの特徴の指摘、衣服等の装いの特徴の見立て、行動傾向・エピソードの指摘、行動傾向・エピソードの見立て、性格の特徴の指摘、性格の特徴の見立て、複合的なもの、その他といった13カテゴリーに分類されることを明らかにしている。また、Crozier & Skliopidou（2002）は成人を対象に調査を行い、本名との比較から、ニックネームの由来が容姿、心理特性、民族の特徴、性別の特徴、動物、名前を振る、有名人、物、役職、植物・食物、その他および分類不可といった12カテゴリーに分類されることを示している。さらに、淡野・前田（2007）も、大学生を対象に調査を行い、回答をニックネームの由来に基づき、ニックネームが名前を振る、ちゃん付け、有名人、くん・さん付け、容姿、ニックネームからの派生、心理特性、漢字の読みを変える、役職、物、出身地、不明といった12カテゴリーに分類されることを明らかにしている。つまり、ニックネームには、その人

の特徴だけでなく、姓名との関係を反映するカテゴリーがあることが明らかにされている。

上記の研究は、ニックネーム自体を研究対象として取り上げているため、ニックネームを使用する相手との関係性があまり考慮されていない。しかし、ニックネームには、呼ばれる範囲や当該人物との関係、当該人物に及ぼす影響も考えられる。例えば、三好 (1999) は、女子中学生に対してニックネームに対する調査を行い、ニックネームで呼ばれるには同じ仲良しグループの人や女子全員といった範囲が存在することを見出している。中條・滝波 (1989) は、小学生および中学生を対象にソシオ・メトリックテストを踏まえた調査を行い、「くん付け」で呼ばれる男子は、学級内において一目置かれていることや「さん付け」で呼ばれる女子が担当教師からしっかりしているという評価がなされることを見出している。また、三島 (2003) は、男子児童の場合には「くん付け」で呼ばれる児童の方が、「呼び捨て」や「あだ名」で呼ばれる児童に比べて学級内における相対的な強さが一般的に強いことを見出し、一方、女子児童の場合には「ちゃん付け」、「あだ名」で呼ばれる児童に比べて、「さん付け」で呼ばれる児童の方が、学級内における相対的な強さが一般的に弱いということを見出している。このことは、女子児童にはグループ内で限定したニックネームが存在し、佐藤 (1995) の指摘する女子生徒は学校生活において特定のグループで行動することが多く、女子の友人グループが異なるものを排除するという特徴があることに関係すると考えられる。つまり、ニックネームには、相対的な強さおよび男女による認知の差が存在すると考えられる。

三好 (1999) は、関係性だけでなく自分が呼ばれているニックネームに対して好きか嫌いかどうかといったニックネームの好悪感情やその理由を自由記述により詳細に検討している。また、淡野・前田 (2007) も、各ニックネームのカテゴリーに対する嬉しさの程度という感情評定を検討している。このように、関係性に付随する情緒面に関してもニックネームを通して検討がなされている。しかし、ニックネームに対する感情評定に関しては、好きや嫌いのような好悪感情および嬉しいといった総合的な感情状態に限ってなされたのみであり、ニックネームと基本感情との関連は不明確である。また、被呼称時に生起する基本感情に基づくニックネームの分類はなされていない。

そこで、本研究では、男女別のニックネームの種類と基本感情との関連、男女別のニックネームの被呼称時に生起する感情評定に基づくニックネームの分類を探索的に行い、比較検証することを目的とする。

方 法

調査対象者

H大学に所属する大学生80名 (男女各40名)。

ニックネーム

先行研究に基づき、重要で代表的なニックネームと考えられる、名字のみの変形、名前の変形、名字と名前の変形、「ちゃん」付け、「くん」・「さん」付け、身体的特徴を踏まえたもの、部活動での役職、出身地を踏まえたもの、似ている有名人を踏まえたもの、性格的特徴、衣服等の装いの特徴を踏まえたもの、行動エピソードを踏まえたもの、計12種類をニックネームとして選定した。

感情評定

基本感情とされる6種類 (喜び・恐れ・嫌悪・怒り・悲しみ・驚き) を各ニックネームに対して感じるかを、「1:まったく感じない」から「5:非常に感じる」の5段階で評定するように求めた。

手続き

それぞれのニックネームの種類は、あなたが親しい同性の友人から呼ばれたニックネームであると説明し、調査対象者に各ニックネームに対する回答を求めた。なお、質問紙における各ニックネームの呈示順序による効果をなくすため、12種類のニックネームをランダムな呈示順序にした4種類の質問紙を作成した。各質問紙に回答する調査参加者は、各20名 (男女各10名) になるように割り当てた。

結 果

男女別ニックネームの分類

男女別に、それぞれのニックネームが持つ基本感情6種類について平均値を算出し、各ニックネームの感情特性とした。各ニックネームの感情特性に対してユークリッド距離の平方を求めクラスター分析 (ward法) によって、ニックネームの感情評定に基づく分類を男性・女性それぞれに対して行った (男性: Cophen's $r=.71$, 女性: Cophen's $r=.56$)。男女を比較するため、同一距離2でクラスター数を選定した結果、両群とも3クラスター解になることを見出した (男性: Figure 1, 女性: Figure 2)。

男性の各クラスターに含まれるニックネーム内容の特徴として、第1クラスターには、性格的特徴や行動エピソードを踏まえたものなどの内容が含まれていた。このクラスターのニックネーム内容は、調査対象者の特性に由来するものと考えられた。第2クラスターには、姓名に関係するものが多く含まれていた。

このクラスターのニックネーム内容は、姓名との関係を反映するものと考えられた。第3クラスターには、似ている有名人を踏まえたものや衣服等の装いの特徴を踏まえたものなどが含まれていた。このクラスターのニックネーム内容は、調査対象者の外見的特徴を反映するものと考えられた。

一方、女性の各クラスターに含まれるニックネーム内容の特徴として、第1クラスターには、姓名に関係するものが多く含まれていた。このクラスターのニックネーム内容は、姓名との関係を反映するものと考えられた。第2クラスターには、部活動での役職や衣服等の装いの特徴を踏まえたものなどが含まれていた。このクラスターのニックネーム内容は、調査対象者の対外的な特徴を反映するものと考えられた。第3クラスターには、性格的特徴や行動エピソードを踏まえたものなどの内容が含まれていた。このクラスターのニックネーム内容は、調査対象者の特性に由来するものと考えられた。

以下では、探索的な検討という本研究の目的を鑑み、ニックネームの3つのクラスターを単位として男女別に分けて分析を行った。

男性の各クラスターの感情評価に基づく特徴

クラスターごとに感情評価の平均値を Table 1 に示した。

Table 1 をもとに、各基本感情に対してクラスターを被験者間要因とする分散分析を行った。その結果、恐れ ($F(2,9)=26.95, p<.001$)、嫌悪 ($F(2,9)=39.42, p<.001$)、怒り ($F(2,9)=22.40, p<.001$)、悲しみ ($F(2,9)=20.92, p<.001$)、驚き ($F(2,9)=9.82, p<.01$) の5つの基本感情においてクラスターの主効果がみられた。

そこで、5つの基本感情それぞれについて多重比較 (Ryan 法, $p<.05$) を行ったところ、恐れ・嫌悪に関しては、第1クラスターすなわち調査対象者の特性に由来するもの、第3クラスターすなわち調査対象者の外見的特徴を反映するもの、第2クラスターすなわち姓名との関係を反映するものの順に評価が低くなった。怒り・悲しみに関しては、第1クラスターすなわ

Table 1 男性のクラスターごとの感情評価

クラスター種類	喜び	恐れ	嫌悪	怒り	悲しみ	驚き
第1クラスター (N=3)	2.41 (0.21)	2.23 (0.04)	2.85 (0.30)	2.71 (0.30)	2.56 (0.19)	2.58 (0.11)
第2クラスター (N=6)	2.83 (0.24)	1.63 (0.13)	1.73 (0.05)	1.65 (0.09)	1.68 (0.10)	2.13 (0.17)
第3クラスター (N=3)	2.70 (0.13)	1.94 (0.06)	2.26 (0.05)	1.95 (0.22)	1.87 (0.25)	2.56 (0.14)

() 内は標準偏差

ち調査対象者の特性に由来するものは、第3クラスターすなわち調査対象者の外見的特徴を反映するもの・第2クラスターすなわち姓名との関係を反映するものよりも評価が高かった。そして、驚きに関しては、第1クラスターすなわち調査対象者の特性に由来するもの・第3クラスターすなわち調査対象者の外見的特徴を反映するものは、第2クラスターすなわち姓名との関係を反映するものよりも評価が高かった。

クラスターごとに各感情評価の平均値をプロフィールとして図示したものが Figure 3 である。

Figure 3 から分かるように、喜びのようなポジティブ感情が高く評価されるクラスターと嫌悪や怒りのようなネガティブ感情が高く評価されるクラスター

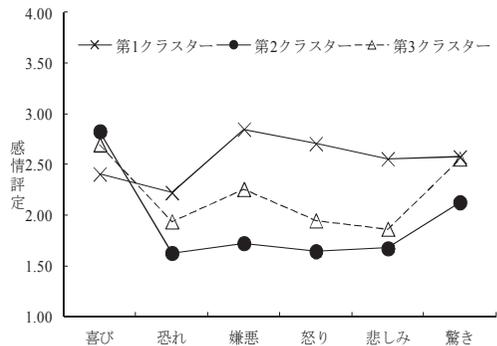


Figure 3 男性の感情評価プロフィール

が存在していた。ポジティブ感情においては、喜びだけでなく、喜びと驚きが同時に読み取られるクラスターも存在していた。各クラスターの感情評価に基づく特徴として、第1クラスターは、嫌悪や怒りが高いニックネーム内容と評価された。第2クラスターは、喜びが高いニックネーム内容と評価された。第3クラスターは、喜びと驚きが高いニックネーム内容と評価された。

女性の各クラスターの感情評価に基づく特徴

クラスターごとに感情評価の平均値を Table 2 に示した。

Table 2 をもとに、各基本感情に対してクラスターを被験者間要因とする分散分析を行った。その結果、喜び ($F(2,9)=31.19, p<.001$)、恐れ ($F(2,9)=18.64, p<.01$)、嫌悪 ($F(2,9)=29.25, p<.001$)、怒り ($F(2,9)=22.77, p<.001$)、悲しみ ($F(2,9)=20.37, p<.001$)、驚き ($F(2,9)=6.80, p<.05$) の6つの基本感情においてクラスターの主効果がみられた。

そこで、6つの基本感情それぞれについて多重比較 (Ryan 法, $p<.05$) を行ったところ、喜びに関しては、第1クラスターすなわち姓名との関係を反映するもの

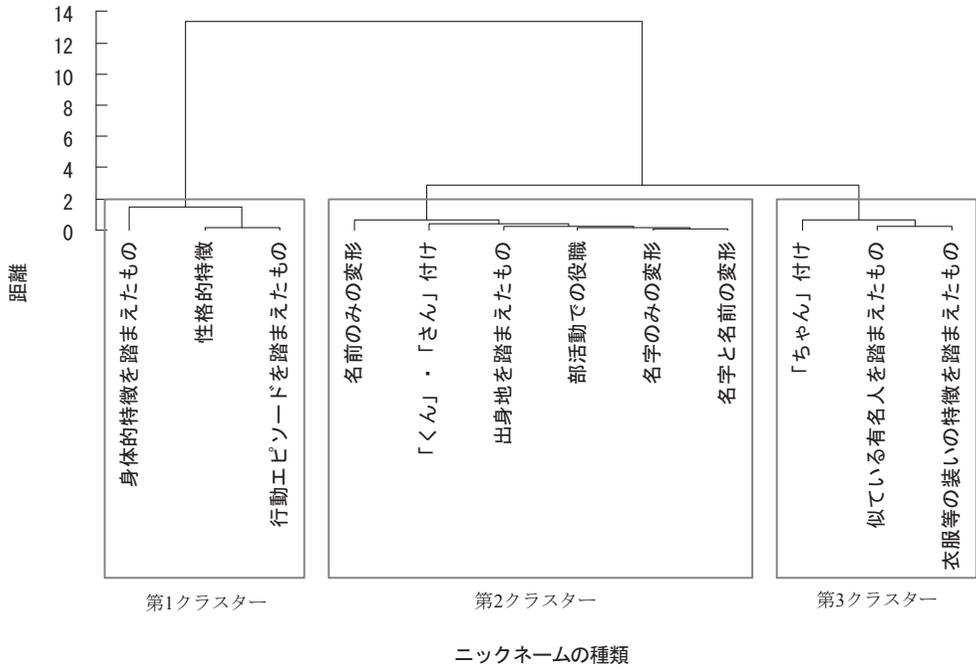


Figure 1 男性の感情評定に基づくニックネームの分類

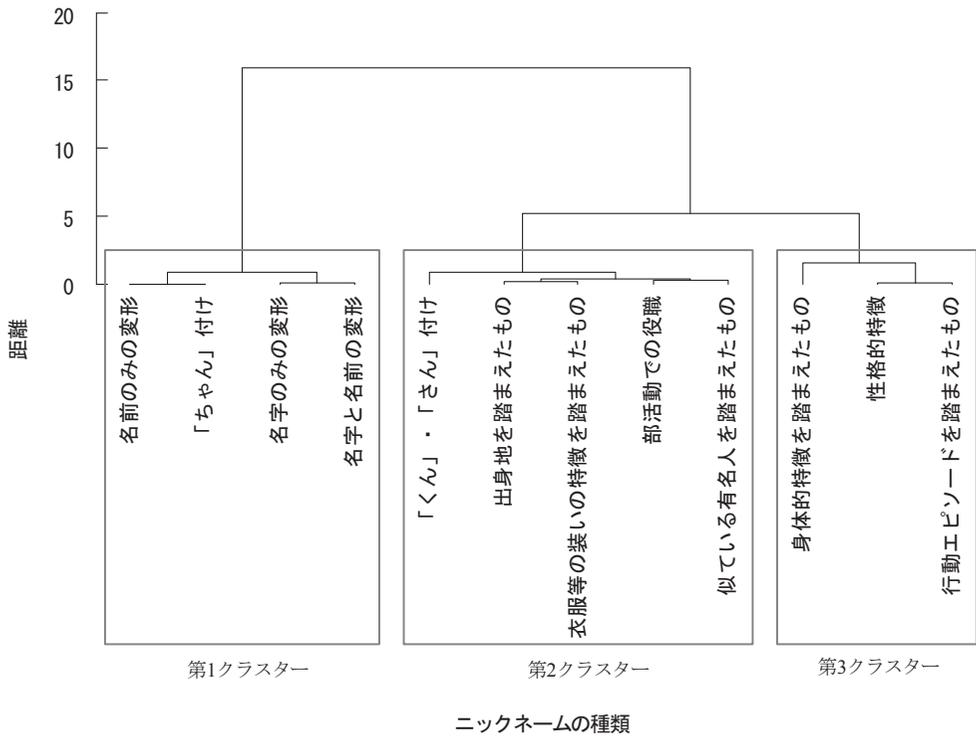


Figure 2 女性の感情評定に基づくニックネームの分類

考 察

Table 2 女性のクラスターごとの感情評定

クラスター 種類	喜び	恐れ	嫌悪	怒り	悲しみ	驚き
第1クラスター (N=4)	3.49 (0.25)	1.46 (0.05)	1.56 (0.06)	1.39 (0.07)	1.41 (0.11)	2.06 (0.18)
第2クラスター (N=5)	2.50 (0.18)	1.72 (0.14)	2.05 (0.18)	1.84 (0.17)	1.95 (0.13)	2.36 (0.21)
第3クラスター (N=3)	2.35 (0.09)	1.99 (0.05)	2.80 (0.27)	2.43 (0.27)	2.50 (0.33)	2.62 (0.08)

() 内は標準偏差

は、第2クラスターすなわち調査対象者の対外的な特徴を反映するもの・第3クラスターすなわち調査対象者の特性に由来するものよりも評定が高かった。恐れ・嫌悪・怒り・悲しみに関しては、第3クラスターすなわち調査対象者の特性に由来するもの、第2クラスターすなわち調査対象者の対外的な特徴を反映するもの、第1クラスターすなわち姓名との関係の反映するものの順に評定が低くなった。驚きに関しては、第3クラスターすなわち調査対象者の特性に由来するもの・第2クラスターすなわち調査対象者の対外的な特徴を反映するものは、第1クラスターすなわち姓名との関係の反映するものよりも評定が高かった。

クラスターごとに各感情評定の平均値をプロフィールとして図示したものが Figure 4 である。

Figure 4 からも分かるように、喜びのようなポジティブ感情が高く評定されるクラスターと嫌悪や怒りのようなネガティブ感情が高く評定されるクラスターが存在していた。ポジティブ感情においては、喜びだけでなく、喜びと驚きが同時に読み取られるクラスターも存在していた。各クラスターの感情評定値に基づく特徴として、第1クラスターは、喜びが高いニックネーム内容と評定された。第2クラスターは、喜びと驚きが高いニックネーム内容と評定された。第3クラスターは、嫌悪が高いニックネーム内容と評定とされた。

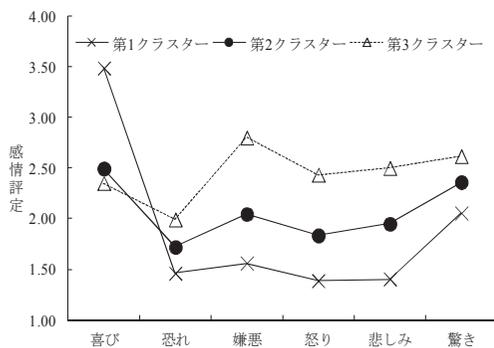


Figure 4 女性の感情評定プロフィール

まず、各クラスターの感情評定の特徴について考察する。男女共に本研究では、喜びのようなポジティブな感情が高く評定されるクラスターが2つのカテゴリで存在していた。すなわち、親しい同姓の友人から呼ばれるニックネームから喜びを知覚されやすいことが示唆された。また、感情の中でもポジティブにもネガティブにも分類し難い比較的ニュートラルな感情である驚き(高橋・大坊, 2004)の高低によりニックネーム分類によるクラスター間に差異が生じることが示唆された。ところが、ネガティブ感情においては男女による差が示された。男性では嫌悪と怒りが同時に読み取られるものが存在するのに対し、女性では嫌悪と驚きが同時に読み取られるものが存在していた。つまり、男女における被呼称時のニックネームに対する基本感情の知覚に差異が生じることが示唆された。そして、恐れや悲しみのようなネガティブ感情はあまり知覚されないものであった。

ニックネームから喜びのようなポジティブ感情、嫌悪や怒りのようなネガティブ感情が知覚されるという本研究の結果は、好悪感情をニックネームから知覚した三好(1999)や淡野・前田(2007)と一致するものである。しかし、三島(2003)のニックネームには対人的な強さが含まれるという指摘から、本研究でも恐れや悲しみも知覚されると予想したが、恐れや悲しみのようなネガティブ感情はあまり知覚されなかった。このことから、被呼称時のニックネームから喚起される情緒面には、基本感情以外の側面があることが考えられた。

次に、各クラスターのニックネームの特徴および男女差を踏まえて考察する。感情評定に基づきニックネームを分類した結果、各クラスターに含まれるニックネームには男女とも身体的特徴を踏まえたもの、性格的特徴、行動エピソードを踏まえたものという調査対象者の特性に由来するものが存在していた。すなわち、調査対象者の特性に由来するものに対して知覚する基本感情は、男女双方に認められることが示された。しかし、クラスター間の距離には男女差が認められた。

また、各クラスターに含まれる「ちゃん」付けおよび「くん」・「さん」付けにも、男女差が認められた。男性においては、「ちゃん」付けが似ている有名人を踏まえたものなど同一のクラスターに含まれているのに対して、女性においては、「ちゃん」付けが姓名を反映したものと同一のクラスターに含まれていた。男性において、「くん」・「さん」付けが姓名を反映し

たものと同一のクラスターに含まれているのに対して、女性においては、「くん」・「さん」付けが似ている有名人を踏まえたものなど同一のクラスターに含まれていた。この結果から、三島（2003）の見出した男子児童の場合には「くん付け」で呼ばれる児童の方が、「呼び捨て」や「あだ名」で呼ばれる児童に比べて学級内における相対的な強さが一般的に強いことを踏まえると、被呼称時のニックネームに対して、青年期の男性は児童期の男子と異なった信念を抱えていることが示唆された。一方、淡野・前田（2007）は、容姿に関連するニックネームよりも「ちゃん」付けで呼ばれる方が嬉しいと感じることを見出している。本研究の結果、女性では「ちゃん」付けの含まれるクラスターは、容姿に関連すると考えられるクラスターよりも喜びというポジティブ感情を高く評定しており、淡野・前田（2007）を支持するものであった。ところが、男性では「ちゃん」付けの含まれるクラスターは容姿に関連すると考えられるクラスターと喜びというポジティブ感情の評定に差が認められず、淡野・前田（2007）と異なるものとなった。つまり、「ちゃん」付けおよび「くん」・「さん」付けには、男女による機能の差異があることが考えられた。このように、クラスター間の違いを踏まえ考えると、ニックネームの意味合いが男女によって異なっている可能性がある。

本研究は、基本感情を生起する刺激として、親しい同性の友人から呼ばれる際の代表的なニックネームを用いて検討を行った。関係性を親しい同性の友人に限定してはいるが、調査対象者によって親しい友人を接触頻度の観点からどのように捉えたかは基準が異なることも考えられる。丹野（2007）の親しい同性の友人でも接触頻度の高低により友人関係の機能が異なるという結果を踏まえるならば、今後は、ニックネームを呼ぶ相手との親しさの特性を詳細に分類した上でニックネームから知覚される基本感情およびそれ以外の情動状態を含めた検討を行い、ニックネームを分類していくことも必要となろう。

【引用文献】

- 赤尾重樹(1986). あだ名・呼び名について 言語生活, 416, 52-54.
- Crozier, W. R., & Skliopidou, E. (2002). Adult recollections of name-calling at school. *Educational Psychology*, 22, 113-124.
- 三島浩路 (2003). 学級内における児童の呼ばれ方と相互関係に関する研究 教育心理学研究, 51, 121-129.
- 三好智子 (1999). 女子中学生のニックネームについての探索的研究 京都大学大学院教育学研究科付属臨床教育実践研究センター紀要, 3, 128-137.
- 中條 修・滝波常雄 (1989). 呼称に見られる対人関係の認識 静岡大学教育学部研究報告書, 40, 1-16.
- 岡本真一郎(2000). ことばの社会学 ナカニシヤ出版.
- 大野木裕明 (2000). 学校教師のニックネーム 福井大学教育地域科学部紀要Ⅳ (教育科学), 56, 25-42.
- 佐藤有耕 (1995). 高校生女子が学校生活においてグループに所属する理由の分析 神戸大学発達科学部研究紀要, 3, 11-20.
- 高橋直樹・大坊郁夫 (2004). 驚きの表情表出における他者との他者の存在の効果—感情教示法と写真教示法を用いて— 対人社会心理学研究, 4, 67-73.
- 丹野宏昭 (2007). 友人との接触頻度別にみた大学生の友人関係機能 パーソナリティ心理学研究, 16, 110-113.
- 淡野将太・前田健一 (2007). 大学生とニックネーム—ニックネームの由来とニックネームに対する感情について— 広島大学心理学研究, 7, 311-314.

【付 記】

本研究は、野中（日本感情心理学会第19回大会・日本パーソナリティ心理学会第20回大会合同大会, 京都, 9月）に対して新たに分析を行い、加筆修正を行ったものである。